

# 高齢者のフルに生きるまちづくり

佐々木 一郎

## 一 歴史的飛躍のシステム開発

この小論の目的をまず結論的に先  
にいうなら、高齢者のフルによく生  
きる社会システムの設計・開発にむ  
けた一歩にでもなれば、ということ  
である。

高齢者すべてのフルによく生きる  
社会開発とその実現は、まことに緊  
急を要する。それはまず第一に、当  
の高齢層の不幸を少しでもなくして  
その幸せを実現するためである。そ  
してそれはその家族の負担と苦悩を  
なくして明るくさせる。そしてさら

には、社会的負担と費用を軽減させ  
るばかりか、その長い人生体験の知  
恵が多様にいかせて人間社会を豊か  
にさせる。その深さと確かさを押し  
広げて何倍ものプラスをつくれる。

しかし、高齢層が心身ともに元気  
に生きる社会づくりができないまま  
なら、以上のことがすべてその正反  
対になる。当の高齢層多数の不幸は  
いうまでもなく、家族の負担と苦悩  
は大変である。社会的負担と費用も  
限度を超えよう。そのシステムづく  
りが遅れば遅れるだけ、その不幸  
・悲惨と負担・費用は莫大になる。

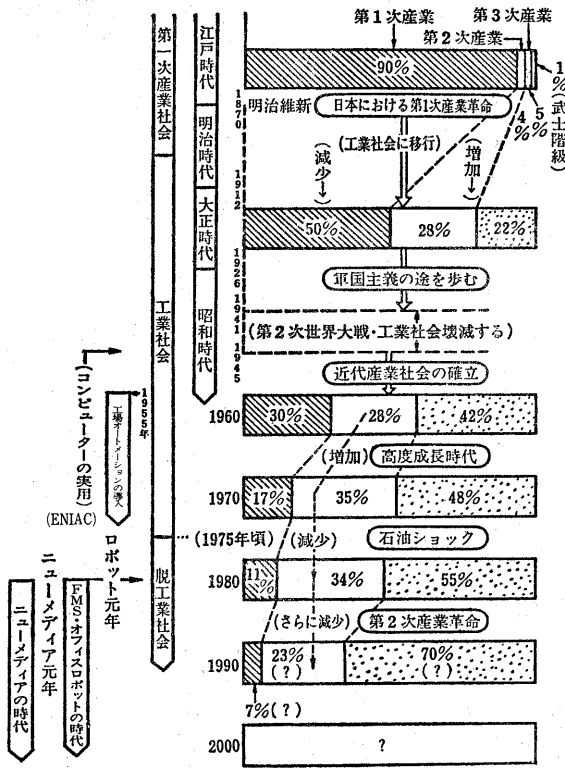
十数年たつて高齢社会になってから  
では取り返しもつかない悲惨が迫る  
う。

平均寿命が八〇歳に迫ろうとする  
時代になった。これは人類史の一大  
進歩だ。社会的生産力の発展と保健  
医療等々の発展。この進歩・発展の  
側面こそ、人間社会の歴史発展の基  
本の側面である。まずなによりもこ  
の基本的前進面をきつちりつかも  
う。多くが人生八〇年になり、第三  
の人生をもてるようになってきた。  
ただし、社会の仕組みの方は依然、  
ほぼ人生五〇年を前提としたときの

- 一 歴史的飛躍のシステム開発
- 二 現実の「不幸」の例から
- 三 高齢者層の存在価値の復権
- 四 まちづくりと高齢者層の復活

ままである。だから、多くの不幸が  
生まれる。せつかく二〜三〇年にわ  
たる第三の人生段階を手に入れて  
も、それがあまりプラスにいきな  
い。この年齢層があまりいないこと  
を前提とし、あまりいなくて成り立  
ち、すませる社会システムのはまだ  
からである。必要とされなければ、  
いきるにいかせない。他人に、多く  
の人みんなに、社会的に必要とされ  
てこそ、自らを大いに発揮・実現さ  
せる。その人自身のもてる質と力、  
特性・個性が求められ大事に役立て  
られて、はじめて人はいきよう。そ

図一 1 わが国の就業構造の変化と経済社会の移り変り



の人自身の出した、力を十分出せて、はじめて人間開花だ。  
 社会的生産力等の発展で多くが長生きできるようになってきた。しかも、新たに形づくられてきたこの年齢社会層をうまく入れて十分いかせる枠がつけられてきてない。これまでの枠組みのままでは、この新しくふえてきた層の多くを収めていけない。それで多くが必要にさらなくて人間的な居場所ももてないようになってくる。不要な存在がするこ

とのない退屈な存在苦痛、不幸な存在を多数生み出す。そしてこの苦痛そのものの不幸な存在が諸々の社会的問題・困難を生み出してきた。そしていまや、この切実・深刻な社会的問題・困難自体がその解消のためにも、今度は社会の組み立ての方の変更を促す。旧来からのこの層を不要扱いのままにさせるそれから、この層を大いに必要とし役立てフルに人間開花させる社会システムへの根底からの組み立てかえを不可避にさ

せる。

これができてはじめて、名実ともに人類史の質的飛躍になりうる。いまやその飛躍は避けて通れぬ歴史社会的課題であると同時に、大いに可能な歴史的位置にきている。まず前者においては、科学技術・生産力発展等で寿命を伸ばした人類史の基本的な一歩前進が、それだけのレベルにまだとどまっていることから、逆に多くの問題・苦痛・不幸を生み出す。しかし、この問題病理は、苦痛・不幸を通して多くを教え学ばず。病理・苦痛・不幸でなく、健康・よろこび・幸せなあり方・状況への新開発と移行を身をもって教え促す。すべてが心身ともに元気でお互いをフルにいかし伸ばせてよるこびあえる人間社会体系の開発と実現に。つまり、諸々の不幸を媒介・跳躍台にせざるをえなかったことは正に不幸なことだが、この社会システムの新開発と体系的な組み立て替えをもつて、人間社会は本質的な飛躍にむかえる。いま歴史はその飛躍期に立つ。

後者の現実可能性の方についてはこうである。かつて人生五〇年だった時代は人間の食物をつくる労働に圧倒的多数が就いていた。社会的総労働の圧倒的部分を食料生産を大衆とするものをつくる労働に投入しないと人間社会の成り立たない時代であった。健康・発達・文化・教育等々の働きもまだ、その肉体をフルに使う生産労働のもとに未分化な形で組み込まれたままにきていた。社会的調整・管理等の仕事もそれを基軸にしたまだ付随的なレベルのものにすぎなかった——勤労庶民の世界にあつては——。社会的な生産力の水準がまだそれだけの段階にすぎず、人類の自然に対する科学技術力の水準がそうだったからである。それゆえ当然、大半が長生きできなかつた。たとえ長生きしなくても、体力の落ちる老人はあまり役に立たない。不要・負担の存在にならざるをえない時代であつた——生産力段階、社会的労働の配分・就業構造等の水準から——。

ところがいまは歴史の段階が異なる

る。基本としてはいまや食料生産は

過剰の時代だ——世界の仕組みに問

題があつて龐大な飢餓難民と食料危

機の危険を生んでも——。その他重

化学部門もふくめてものの生産面は

世界的な過剰の時代だ。それゆゑ、

産業別就業構造も職種別構成の方も

大幅な変化をたどつてきている。健

康・発達・文化・教育等々の分野が

社会的に機能分化・独自化してきた

と同時に、大幅に増えてきている。

社会的調整・管理関係の分野も同様

である。社会の仕組みはまだ旧来の

ままでも、内実はすでにこの構造的

変化だ。F・A・O・Aがなるなら、一

層のことそうなつていこう。もちろ

ん、この形と中身の背反・ギャップ

が甚大な社会的・心理的屈折・葛藤・

緊張・欲求不満を生み出す。それゆ

え、現状はまだこのストレスと不満

・病理等をつのらせると同時に、た

だ発散させ、はらし、いやさせるだ

けに働く場合も多かるう。莫大な人

間的活力・エネルギー等を無駄にす

るまつたく自己撞着のシステムであ

る。しかしここからさらに一歩進ん

で、健康・発達・福祉原理のシステ

ムがつくられていくなら、これらの

業務が名実ともいきてくる。すでに

多数になつた健康医療、発達・文化

・教育関係、そして社会的調整と共

同的管理の仕事が本来の姿を示して

こよう。一人ひとり、すべての人間

的生命・可能性が無限に開花・実現

するためだけに結び機能しあつてい

くようになる。しかも、ここでは、

体力は多少落ちてても長年月にわたる

豊富な人生体験の知恵の方こそま

重要な力にいきよう。いま人はその

入口に立つ。

## 二——現実の「不幸」の例から

一方で大きな前進面を見せている

のに、他方でそれを十二分いかせる

トータルな社会システムが生み出せ

てきてない。そこではその時期特有

の新たな問題・困難と累々たる不幸

を生み出してくる。

ある老人(七六歳)の例はこうで

ある。妻を亡し、自らも脳軟化症で

二年ほど入院した。主治医からは

「これ以上、よくも悪くもならな

い」と言い渡される。他人には「お

はよう」程度だ。その老人が何度も

失跡をする。とくに子どもみんなが

集まり誰が引き取るかの議論の後で

だ。子どもたちの家では必要とされ

ない。役に立たない。事実の問題、

大事にされない。「親孝行」の娘の

家にも負担・迷惑のみをかけるとす

るなら、語る言葉ももてない。

だからこそ、千葉県流山市で「メ

デュトピア」の建設を目指す庭瀬医

師は老稚園の試みも行う。「老人た

ちが月一回集まり、地域や老後のあ

り方を話し合う。「高血圧に悩ま

れていたのに、老人の集いの世話役

を引きうけたら、血圧が下がってし

まった老人(七二歳)」。家庭内の状

況変化で家事等で必要とされる事態

になるなら、元気になるケースも出

てくる。しかし、新興住宅地域で、

地域に人間的な共同関係がなく、家

族のみが孤立したままにあつては、

幾多の年月をせつかく生きた豊かな

人生体験もいかすにいかしていけな

い(以上の事例と実践的営為は『朝

日新聞』のシリーズ「等しきもの、

若い」八十三年九月十二―五日付

ら)。

中小零細の町工場の集まる京浜川

崎・鶴見地域などではもつと深刻で

もある。働き盛りの者でも、木造密

集アパート地域をなかなか脱しきれ

ない。これだけですでに精神的にも

やられてすさんでいきうる。ここに

老婆などが引き取られて、たとえ寝

込むようになっても容易に世話がさ

れない。共働き等々、子ども夫婦自

体がせいっぱいである。もちろん

介護の仕方などもおよそ知らない。

それでいったん寝込むと急激な衰弱

にもなりうる。全身垢だらけに床す

れ、病院に持ち込まれたときには、

もうひからびさされて、表情も能面

のように無表情になつてしまつてき

ている。しかし、そこでの熱心な治

療・看護と心からのいたわりでやっ

とのことで顔も和らぎ笑い声も取り

戻せるようになってくる。しかし、

引き取りを押し付け合つた家族がく

ると表情も一転、急にもとのこわば

つた顔に戻つてしまふ。

この地域は独居老人も多く、地域社会自体も衰退過程を深めてきている(ある熱心な病院の看護婦さんからの聴取りから)。

私たちの廻った上大岡地域の寝たきり老人の場合はまだ幸せな方かも知れない。

あるお婆さんは、私たちが訪ねていくと、私たちを医学部の先生と間違えてか、何度も何度も泣きじゃくりながら、私たちに願った。

「お願いですから、何かいい薬を下さい……。誰にも決していいませんから、内緒で何かいい薬を私に下さい、……。お願いですから……」

薬に死ねる薬を分けて下さい。絶対、誰にもいわないですから……

生きてるのが辛くて、辛くて……。

娘も私の世話ばかりで、かわいそうです。先生、お願いですから、何かいい薬を分けて下さい……

この八八歳のお婆さんは風呂上が

りに階段でころんで大腿部を骨折して入院、以来寝たきりになってしまった。それ以前は丈夫で丈夫で、娘のときからずうっと働き者で通ってきた。だからいま胃腸は丈夫で、何も出来ない分だけ、朝から晩まで食べたがって仕方がないといわれる。これまできわめて元気できただけに、寝たきりはつらくて仕方がないのである。

三〇分ばかりか、この泣きじゃくった願いであったか。このままでは帰るに帰れぬ。こんな形で帰ってしまう。後に残った娘さんがさぞかしお困りになるだろう。

「お婆ちゃん、若い頃はさぞかしおきれいだっただんでしょう?」

「私が屏風浦の船主の家から、ここに嫁いだ頃には、まだここから下はずうっと田畑で、家もまだ何んぼもなかった……」

この辺はきれいなところで、家のところから清水が湧き出ていて……。

お隣りは異人さんの洋館の屋敷で、よく馬に乗って山を越えて帰

ってこられた。前が芝生で、よく遊びに行ったものです……。

私は働いて働いて、ずうっと働くことだけが生甲斐で、ここから上の山のでっぺんまでみんな耕し、それでその家も私が建てたんです。それが震災で潰れて、また建て……。

これで二時半近く、泣きじゃくっていたお婆さんも生々いきてる。震災からあとのお話はまた次に聴きにくるからと帰ってきてから、いままって訪ねていけないままにきている。お婆さんは元気だろうか。約束が果せず、心が重たい。きれいな花壇と植木の庭があり、別棟の広い家があり、家を継いだ娘さんが側にいて世話をしている。しかも、幼馴染のお爺ちゃんたちが三日にあけず話にきてくれてもいる。

このケースに対して、別のお婆さんはここに移り住んできた人のケースである。このお婆さんは、ここ上大岡近辺が急激に新興住宅地になっていった二〇年近く前にここに出てきた。高成長期に子どもをみんな東

京の大学に入れた。そして子どもはみんなこちらに勤めた。それで秋田の伝来の田畑を手渡し、ここに家を建てて移ってきた。その生い立ちから秋田の旧家に嫁いだ、その豪農の家の生業ぶりとその大お婆さん、お母さんのもとの家の切り盛り。平均三〜四時間寝れたかどうか。戦中・戦後の激変を通して、少しも安定してくると子どもたちをみんな東京の大学に入れ、そして自分も子どもたちに引かれてこちらにでてきた。

慎み深いこのお婆さんの話も、ちよつととうまく聴くなら、「おしん」に負けないものにも描けよう。しかし、現状では、ここを訪ねて聴く人もまずはあるまい。勤め人の居住地域で、近隣相互の人的なかわりあいもほとんどもててない。町会の方や保健婦さんなどが訪ねてくるのも二年に一回程度だ——「そんなことは他にはいわないで下さい、御迷惑をおかけするだけです……」と——。遠くの専門病院にかかっているから、地域のお医者さんに

もみていただけでない。この家に残った娘さんの勤めの都合で昼中はほとんど一人だけになる。

残念至極だ。このお婆さんにも約束が果せてない。長い年輪をかけて一人ひとりに集積された、またとはいえない生きた歴史がみんなのものにかされることもないまま、埋れたままに、二度とは帰らぬものに消えていくとするなら。

### 三——高齢者層の存在価値の復権

高齢者みんながよく生きていくには、高齢者みんなのよく生きる社会システムが必要である。とりわけ長い人生をつみ重ねてきた高齢者一人ひとりをなくてはならない、代りのきかない大事なものとして必要とする社会システムの創出が不可欠である。社会の方が高齢者を不可欠なものとして必要とする社会になつていかないかぎり、本当のところ、高齢者層はフルにいきまい。

もちろん、高齢者自身が心身ともに健康に生きていけるように、自分

たち自身がいろいろと取り組んでいくことも不可欠である。お互いに十分憩えてたのしみあえるよう身体も心も動かす。諸々のスポーツ、文化、学習活動。元気な人がその諸々の世話役ばかりか弱った人の面倒もみていく。この相互扶助的な活動もふくめた高齢層相互の諸々の活動の場と手当を身近なところに十分整備していくことは不可欠である。

しかし、それと同時に、高齢者層が社会的に必要とされている、実態的にいうなら若い各世代からその次への前進のために高齢者層の知恵と力が大いにかげがえのないものとして求められている、ということがより重要ではないのか。高齢者としても日々元気に生きていきたい。スポーツ、文化、学習などで心身ともに充実した生活を送っていきたい。保健医療・生活保障面もふくめて、これらが社会的に十分保障されているなら、それはまず、誠にあるがたいことだ。ということになるだろう。しかし、何かまだ足りない——これは老人福祉医療の先進地の高齢

層から聴いたものである。心から温かく保障されていてもそれだけではやはりまだどこか満たされないものがある。まして不要扱いで、迷惑、負担がられるところにおいてはなおのことそうだろう。元気にいたい。運動などをする方が健康になれるので社会的医療負担の軽減の面でもいい。これはわかつていいる。しかし、社会的に用済み、用なし扱いで、自分たちが生きていける意味も存在価値も実態的にはおよそわからないところ、そんなにできるだろうか。

他人がどうなり、社会的負担がどうなろうと、ただ自分たちが元気で長生きしたい、できればよい、の自分たちだけの論理で本当にやれるものでもあるまいか。社会的費用負担の軽減のためということでは一層さうである。

生きていける以上は、何らかの役に立ちたい。他者みんな何らかの必要に依って、自分が一個の人間として本当に大切で必要とされているのかどうか。これが疑問にされてくるなら、それは幼児をもうたく苦しめ、

諸々の拒絶反応と発達障害を生んできもする。どれだけ自覚症状があるかは別として、長い人生を歩んできて諸々のものを自らの手でつくり出し後の世代に譲り渡してきている高齢層にあつては一層のことそうだろう。

人間であるなら、本能的にも、意味を問う。自分自身が現にここにいて、生きていけることの意味が問われる。自分自身のためにはもちろんのこと、他者、まわりのみんな、社会全体にとつても、何らかのプラスの意味をもちたい。積極的な意味、存在価値をもちたい。これも人間がよく生きるに於いての基本的な欲求なのである。不可欠な必要条件である。若い先短い高齢者にとつては、この場合、自分自身（の将来的な成長・発展）にとつてというより、他者、みんな、社会全体にとつての方が圧倒的なウェイトになつてくるだろう。つまり、後の世代の、社会のこれから前進にとつて、自分たちの生きていけることが積極的に役に立つ。後の世代に、自分たちの長年来

の蓄積を引き継ぐ形で、高齢者層は積極的に生きていく、ということであるだろう。

みんな、若い人たちもそのうちいずれ老人になるのだから、いまのうちから……といういい方などはあまりに弱い。高齢者自身の存在価値は本当はないのか。もともとずっと高齢者本来の積極的な価値を明確に押し出し、そのフルにいかせる社会システムの創出にむけていくべきである。なにしろ、それは、高齢層ならではの積極的価値がフルに生きると同時に、それを必要とし、そしてそれにもよって他の全年齢層も、つまりすべての人がフルによく生きる社会システムの形成になることだからである。短期集中決戦・一点投入型の競争的企業社会にあつては、老人や乳幼児は足手まといになつても、後述するように超長期総合視点の不可欠なまちづくりにあつては、長年の人生体験の集積された高齢者層の知恵と力が必須となる。

#### 四——まちづくりと高齢者層の復活

高齢層一人ひとりが必要とされる存在価値がフルにいきる社会システムをつくっていくには、各日常生活圏からのまちづくりを大々的にすすめていくことが一番である。

まちづくりにおいては、数十年、百年を超える長い視点と尺度が不可欠である。関東大震災のときにはどこが崩れて、どこがもともひどくやられた。いついつの風水害のさいにはあそこがやられて流れた等々。これらは現実にととき身をもって体験した人々に勝るものは決してあるまい。現に一昨年の長崎水害では、山を削ってつくられた新興住宅地域が壊滅的にやられた。ところが江戸時代末期の災害のいい伝えがいまに生きている地区では、古老が早速避難を訴え被害を最小限にとどめた。つまり、数十年、百年単位の自然災害にも耐えうる、災害に強いまちづくりにあつては、身をもった体験とその引き継ぎこそ不可欠であ

る。現在の科学技術を駆使した地学的調査なども必要だろう。しかし、どういうときどこに避難し、どう対処するか等々についてはやはり諸々の体験知の裏付けなしには現実の役に立つまい。ただの防災訓練だけというより、各日常生活単元に、そこに数十年來生活する高齢者層に集まってもらつて、いろいろと体験談を引き出しあつて学びあう。それで、

各地区の実情に即した対処策はもちろん、その何倍ものプラスがつくれる。いざ災害のさいにも無用な混乱などなくみんなまとまつて動ける。みんなの日常から変ろう。防災面からでも世代を超えた多数の共通の認識・理解が深まる。地域社会に心強さが広がる。

そしてそれをもベースに、もっと大きく日常普段の現実が変り始める。残されてきたあそここの丘や緑・水の自然は地域の宝に守つていこう。あそこの建物や家並みなども修復して残していこう。防災面ばかりか、自然・環境保全にもなり、歴史性の蓄積もある、落着きとらるおい

のある地域社会をつくつていける。ここで高齢層の知恵と力は絶大である。これらの作業を通して高齢者一人ひとりの生い立ちから幾多の時代の変転を経たこれまでの歩みがみんなの共有物にいきっていく。そしてその存在価値の光り、深くわかりあつたお互いどうしのかかわりあいがある地域社会の内実からつくりかえていくようになる。

災害に弱い、危険度の高い地域においては、以上のことはなおのこと緊急を要する。危険度の高い地域は、災害時に危いばかりか、平時においても日常不断に住民多数の健康・発達・福祉を蝕んできているからである。例えば、公園も広場もほとんどない密集地域においては、子どもが発達不全・障害等が多発する。

後々からでは取り返しつかないほどの問題を背負わす。高齢層の健康・福祉にももちろんよくない。元氣盛りですぐにはみえてなくとも、本当は成人層、青少年層の心身にも非常によくない。それゆゑ、ここでは、いつきてもおかしくない震災などに

も耐えうる災害につよいばかりか、いつも住民すべてが心身ともに健康で発達の生きていける地区への環境改善事業が緊要不可欠である。幼児どうしが自然のうちに友だち

になって一緒に遊べる。児童が戸外の集団遊びを夢中にやれる。高齢層も十分くつろげ大いに憩える。成人層や青少年層もスポーツ・文化活動等を存分になしうる。そのための公園・広場や各種施設等を各層のニーズ・希望を入れてつくり出す。企画・構想・設計段階からそれぞれが入って、それらを地区ごとに練り上げ

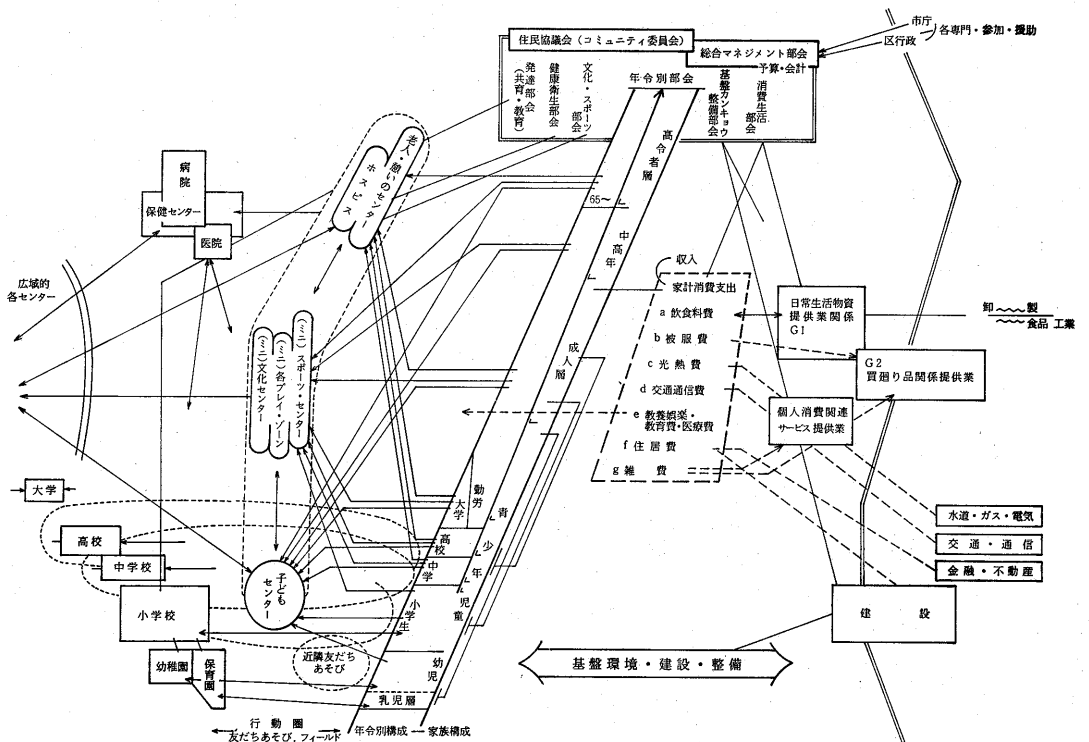
まとめ上げていく。そのためには、地域環境改善事業等の計画策定権を実質日常生活圏単位に戻すと同時に、それぞれが策定にむけて取り組んでいくようにする援助・助成の手当等が不可欠である。そして同時に各単位ごとに整合性ある計画にまとめ上げていくものとして、まちづくり委員会とかコミュニティ委員会等の設立も不可欠である。これは現町内会等の拡充強化で可能になる。しかし、それは決して一部委員会の

みが作業するためではない。各年代、各業種のそれぞれがその欲求、希望や特性等を出しあい、それらを整合性あるものに総合的にまとめ上げていくためである。

そのこと自体が肝要である。なぜなら、その過程でそれぞれがその夢と希望・理想をふくらませ、企画提案力をつけていく。それぞれが建設型人格になって、他のものと積極的につけあわせていくようになる。それぞれについての深い相互理解がすすむと同時に、すべてのものの相互連関の上でお互いの生活が成り立っているという、お互いの生活と社会の成り立ちについての総合的な認識・判断力等も身につけていく。こうして、まちが自分たち自身のものになりだす。共有・共同のまちに変わりはじめ。

これではじめて、諸々の難関突破にむかえよう。これだけの心理的・社会的共通基盤がつくられてはじめて、土地・建築協定をはじめとする住民協定も結べよう。幼児・児童・高齢層の遊び場・施設等を町内のセ

図一 高齢者のフルに生きるまちづくり概念図



センター的部分につくろう。成人層や青少年層のは小・中学校区単位でもまだよからうが、これらの層の歩行半径では数百メートル以内がなによりだからだ。老朽・危険、建替を急ぐところを四、五階建にしてみたら、センター部分のスペースをつくらう。そこには安心してたのしみながらいける遊歩道で結ぼう。地域環境全体が快適・安全なものになると同時に、すべてがより良好な居住条件のものに入れるよう最大限の工夫をこらそう。建替などには融資や助成をつけてもらって高家賃などにならないよう知恵をしぼらう。

以上のような立案・協議・調整・合意・協定化への作業にむけては、「老賢人」、とくに土地持ち「老賢人」の存在がカギになる。幾多の変転を経てきた長い人生体験の集積か

ら、自らの内でそれを反芻・熟成すると同時に、ヘンなことわりや執着もない高みに立って、何こそ大事かを下せる「老賢人」の多数現われ出てくるのがカギになる。それは、健康・発達・福祉基本のまちづくりにむけたみんなの共有・共同性の回復が可能にするだろう。幼少年が心身ともに元気な成長そのものになり、青少年が明日への夢と理想を大きくつくり、成人層がそれらの現実化と卒先奮闘していく。そこに深くかわり、そこにかげがえのないものに求められるようになるなら、老人みんなが大きく甦って、生きかえしていくだろう。古来からの生活の知恵のじんだ遊びや物語などの子どもたちへの引き継ぎ、青少年や成人層への実体験的近現代史等々の「教室」。これらにおいては、全国

各地から移り住んできた高齢者層も大活躍である。各地の遊びや物語など、豊かな宝庫ができよう。地域移動の人生ならば、なおのこと地域と時代を超えて何こそ大事かのより普遍的な価値についても、体験記のなかから出るだろう。

これらがあるなら、若い世代もなおのこと、「老人介護」や「福祉」の仕事も大いに学び加っていくだろう。これらは環境改善事業にむかう前でも、きちんと「仕掛け」をつくればすぐにもすすめる。

もちろん、以上のことが、各日常生活圏単位に、濃密な面的広がりとして取り組みをもつてすすめていけるようにするには、とくに当初における行政側の役割は重大である。介護の仕方、埋れた体験のたのしく豊かな聴き出し方等々の研修・トレーニング

グから、全年齢を通した健康・発達・福祉指標とそれが基本のトータルな社会システムのつくり方、現状での諸々の逸脱や障害・病理等々の発見の仕方や測定・診断法、ここには健康医療、発達教育、福祉関係の専門家が軸になると同時に、自然環境、建築設計、防災、さらには経営経済等々の専門家も総合的に連携してることが不可欠となる。諸々の「仕掛け」づくりも当初においてはとくに重要になる。行政側が諸々の専門家集団を総合的に組んで、各日常生活地域に出ていく。人間一人ひとりに、住民すべてのフルに生きるまち

——都市社会復興にむけては、自治体行政側での思い切った発想や行動様式の転換・システム転換も必要不可欠ということだろう。

△横浜市立大学文理学部助教教授▽